



吉野彰氏に「ノーベル化学賞」 リチウムイオン電池開発



スウェーデン王立科学アカデミーは9日、2019年の「ノーベル化学賞」を、リチウムイオン電池を開発した旭化成の吉野彰・名誉フェロー（71）ら3人に授与すると発表した。リチウムイオン電池は軽量かつ高出力で、充電して繰り返し使える。スマートフォンやノートパソコン、電気自動車などに広く使われている。化石燃料に頼らない社会の実現に向けた貢献が評価された。授賞理由は「リチウムイオン電池の開発」。同時に受賞するのは米テキサス大オースティン校のジョン・グッドイナフ教授（97）、米ニューヨーク州立大ビンガムトン校のスタンリー・ウィッティンガム卓越教授（77）の2氏。グッドイナフ氏は1901年に授与が始まったノーベル賞史上、最高齢での受賞となる。

授賞発表後、東京都千代田区の旭化成本社で記者会見した吉野氏は、「化学は分野が広いので、順番がなかなか回ってこないと思っていました。家族に伝えたら、腰を抜かすほど驚いていました」と笑顔で語った。

吉野氏は旭化成の研究者だった1981年、携帯用の家電などに搭載する小型充電電池の開発に着手した。グッドイナフ氏がコバルト酸リチウムのプラス極を発案していたリチウムイオン電池に着目、マイナス極に特殊な炭素材料を使うことを考案した。85年に、繰り返し充電できるリチウムイオン電池の原型を完成させた。ウィッティンガム氏はそれに先立つ70年代、金属リチウムを使った電池を開発した。調査会社の富士経済によると、リチウムイオン電池の世界の市場規模は約4兆7855億円に上る。近年は電気自動車の電源の需要が増えており、省エネや大気汚染対策の分野でも応用が広がっている。さらなる小型化や大容量化をめざし、世界中で性能の改善が進められている。

日本のノーベル賞受賞は、2018年に生理学・医学賞を受賞した本庶佑（ほんじょたすく）・京都大特別教授に続いて、米国籍の2人を含めて27人目。化学賞は10年の根岸英一氏と鈴木章氏に続いて8人目。企業研究者の化学賞は、02年の田中耕一氏以来で2人目となる。授賞式は同賞の創設者アルフレッド・ノーベルの命日にあたる12月10日、ストックホルムで開かれる。賞金の900万スウェーデン・クローナ（約9700万円）は、吉野氏ら3氏で3分の1ずつ分ける。 10/9「読売新聞」

吉野彰氏（よしの・あきら）1948年、大阪府吹田市生まれ。70年京都大工学部卒、72年同大大学院修士課程修了。同年旭化成入社。イオン二次電池事業グループ長、電池材料事業開発室長、顧問などを経て、2017年10月から同社名誉フェロー。名城大教授も務める。05年に大阪大で博士（工学）取得。14年に「工学のノーベル賞」とも呼ばれる米チャールズ・スターク・ドレイパー賞、18年に日本国際賞を受賞。